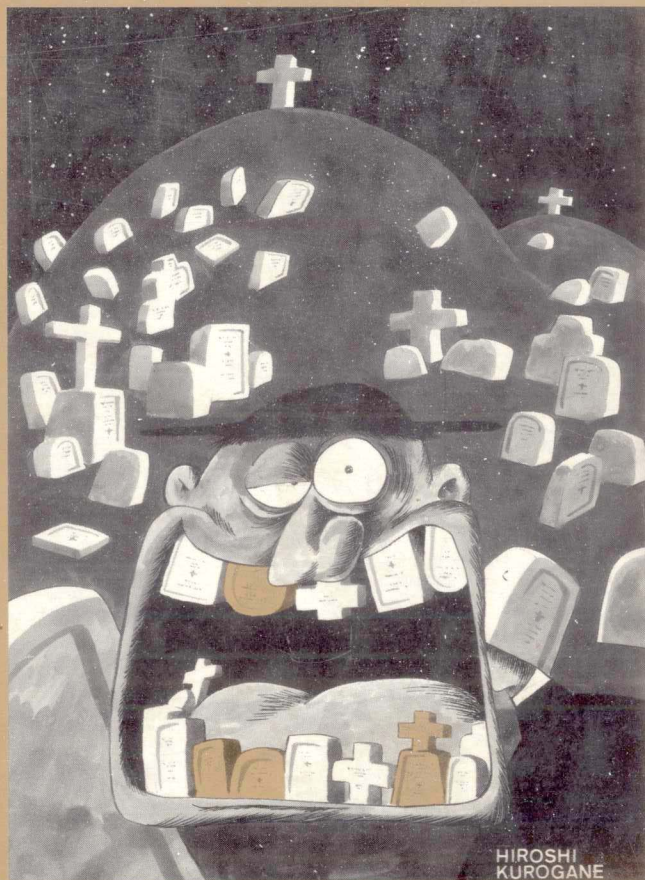


悪意のきれっぱし

生島治郎



悪意のきれっぱし

生島治郎



悪意のきれっばし

定価 980 円

昭和55年7月15日 第1刷発行

著 者 生島治郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© JIRO IKUSHIMA 1980 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

不完全犯罪	5
片眼の男	23
死ぬほど愛して	39
ぶうら、ぶら	57
時効は役に立たない	89
念　　姦	113
他力念願	127
アル中の犬	149
暗　　殺	165
蜘蛛の巣	177
タクシイ・ジャック	195

装丁 黒鉄ヒロシ

悪意のきれつぱし

不完全犯罪

誰にでもよく知られている外国の小咄にこんながある。

昼休みに自宅へ昼食をとりにもどったある銀行員が、あたふたと帰ってきて、冷や汗をかきながら、同僚にささやいた。

「ついさっき、あやうく頭取にみつきりそうになったよ」

「どこでだね？」

と同僚は訊ねた。

「きみは自宅へ帰ったんじゃないのか？」

「そうなんだがね。自宅へ帰ってみたら、なんと、頭取とうちの女房が寢室のなかにいるじゃないか」

銀行員はさもホッとしたように冷や汗をぬぐった。

「ふたりとも夢中だったんで、ぼくが寢室の扉を開けてなかへ入りかけたのも知らなかったんだ。みつきらなくてよかったよ。みつきたら、あのウルサ型の頭取のことだ、即座にクビになるところさ」

この小咄には、サラリーマンの哀感と残酷なユーモアがこめられている。

実を言うと、私もこれに似た経験をした。

もっとも、私の場合は、この銀行員とは逆の立場だったとも言えるのだが……。

私はある二流の貿易商社の営業部に勤めている。年齢は三十二歳で、ようやく係長になったばかりだ。

ところが、同じ営業部の課長で野呂順平という男がいる。

野呂は私と同期に入社し、とくに能力があるわけでもないのだが、課長にいちはやく抜擢された。というのも、彼が社の創設者で、今年八十歳になるのにまだ矍鑠^{かくしやく}たる会長の孫にあたり、現社長の

三男というコネがあるために他ならない。

もし、そんな強力なコネがなかったら、おそらく、能力のない彼のことだから、いまだに係長にもなれなかったろう。

私は自分より能力のない野呂が上司であることがうとましくてならなかった。

しかし、内心うとましく思いながらも、いずれは野呂が部長になり、社長の椅子は無理にしても、重役になるであろうことを予想して、せいぜいと彼のご機嫌をとりむすんでおこうと気をつかった。

野呂は、そういう私がお気に入り、仕事の上でも大いに頼りにし、また仕事外の遊びでも、私をよく誘った。

おたがいにもまだ独身でもあり、同期に入社したという気安さもあつたのであろう。

野呂には、仕事上の能力もなかったが、遊びにかけても、あまり才能があるとは言えなかった。

ただ、金があり余っている身分だから、どこかのバーやクラブへ行ってもちやほやされて、当人はそれでけっこうモテた気分になっているだけである。

それでも金の威力に負け、野呂の言いなりになる女性が何人かはいた。

銀座の高級クラブのホステスである亜麻子もそのひとりだった。

野呂はモテないくせに浮気性で、いろんなホステスに手をつけるのだが、亜麻子にだけは特別な感情を抱いていたようである。

その証拠に、亜麻子には、四谷のマンションの一室を買ってやり、家具をとり揃え、しょっちゅうそこへ入りびたっていた。

たしかに、亜麻子は魅力のある女だった。

背はすらりと高く、ちょっと見には痩せているようにみえるが、実際は着痩せする方で、うすいド

レスをまよっているときなど、バストやヒップのゆたかだなめかしいカーヴがありありとわかった。

背のわりに顔は小ぢんまりしていて、大きな眼が目立ち、その眼がいつもうるんでいて男心をそそる。

野呂と一緒に亜麻子のいるクラブへ飲みに行くたびに、私は次第に彼女に心魅かれていった。

（こんな女を自分のものにできたらな）

私には仕事上のこととは別に、亜麻子のことでも野呂に嫉妬を感じないわけにはいかなかった。

（野呂のやつめ、今に思い知らせてやるぞ。おれはきっとこの女をモノにしてみせる）

その機会は案外早く訪れた。

店が終ってから、亜麻子ともうひとりの新人のホステスを連れて、六本木へ食事に出かけたときのことである。

野呂はかなり酔っぱらっていて、酔っ払うと、例の浮気性が頭をもたげ、新人のホステスを口説きはじめた。

当然、亜麻子は機嫌がわるくなり、野呂と言い争いになり、わがままな彼は彼女を怒鳴りつけた。

「おまえなんか目ざわりだ。消えてしまえ！ とっとと帰れ！」

「いいわよ、帰るわよ」

亜麻子はすっと椅子から立った。そして、私をみつめた。

「立木さん、あなた、あたしを送って下さらない」

私はどうしていいかわからなかった。彼女を送ってやりたいのはやまやまだが、そのために野呂の機嫌を損じては、今後が思いやられる。

「立木くん、送ってやってくれたまえ」

ところが、野呂の方からそう言いだした。

「すまんけど、あとはよろしく頼む」

野呂としては、そのお目あてのホステスと一刻も早くふたりきりになりたいばかりに、私にも消えてもらいたかったのだろうし、私なら、亜麻子を任せてもどうにもなるまいとタカをくくつてもいたのだらう。

「そうですか」

私はひそかに野呂にウィンクしてみせた。

「じゃ、亜麻子さんはぼくがお送りします。課長はどうぞごゆっくり」

私のウィンクを野呂は『うまくやれよ』という合図だと思つたらしく、彼もニヤッと笑つてウィンクを返した。

私と亜麻子はタクシイを拾い、彼女のマンションまで行った。

「ねえ、立木さん、ちょっとお寄りにならない？ お茶でもさしあげたいわ」
意外にも、彼女の方から誘いをかけてきた。このチャンスに逃す手はない。

「よろこんで」

と私は応じた。

「しかし、そんなことをして、課長にみつかるはずないな」

「かまうもんですか」

彼女はいささか荒れ気味だった。

「あの人は、どうせ、さっきの娘とどこかでよろしくやっているわよ」

「だらうな」

私は彼女の肩をそっと抱いた。

「課長も勿体ないことをするもんだ。あなたみたいな魅力的な女性がいながら、他の下らない女にちょっかいを出すなんて」

「あれがあの人のかせなのよ」

亜麻子はうるんだ瞳で私を見あげ、自分も私の腰に手をまわした。

「それに、あたしはあの人なんか愛しちゃいけないわ。お金で割り切ったつきあいをしているだけなの」

ふたりは彼女の部屋の中へ入った。

扉を閉めたとともに、玄関先で、彼女は私に抱きついた。

「立木さん、本当は、あたしは前からあなたが好きだったのよ」

「実を言うと、ぼくもそうだった」

私は彼女の耳もとでささやいた。

「けれども、課長の彼女だからきみを好きだとは打ち明けられなかったんだ」

「うれしいわ」

彼女はいつそう強く私を抱きしめた。

「あたしを放さないで」

ふたりはむさぼるように唇を求めあった。

こうして、私と亜麻子は深い関係に落ち入った。

といって、ふたりの関係をあからさまにするわけにはいかない。

私の方としては、野呂にこのことをカンづかれれば、出世の道をふさがれるか、わるくすると会社をクビにされかねないし、亜麻子にとってみても、野呂は大切なパトロンだった。

私には、現在でも、彼女のぜいたくな生活を保証してやるだけの余裕などあるわけはなし、ましてや、会社をクビになっただけなら、自分独りの暮しさえ心もとなかった。

したがって、ふたりはこのことを誰にももらさず、誰にもわからないように気を配ろうと約束した。

「あたしとデートしたいときには、電話でコール・サインを送って」と彼女は言った。

「はじめ三回鳴らして、それから、一回、そこで切ってもう一度かけ直してくれば、あなたからの電話だと思って必ず出るようにするわ。もし、そのコール・サインが鳴っても出ない場合は、あの人が部屋に來ているものと思ってちょうだい」

「そんな厄介なことをする必要はないじゃないか。ぼくが電話をして、彼がいたら、そのまま出ない方が自然だろう」

「そうはいかないのよ。あたしのところにはお店の關係上、いろんな電話がかかってくるんですもの。そういう電話とあなたからの電話とは區別しておきたいの」

「なるほどね」

私は彼女のそういう申し出を愛の証と受けた。事実、彼女が野呂より私を愛しているのはたしかのように思われた。野呂は彼女に莫大な金を渡しているが、私は彼女にほんのわずかな小遣い程度の金を時折渡すだけにすぎない。

それでも、彼女はコール・サインの電話をするたびに、必ず、私を自分の部屋へ迎え入れてくれた。

しかも、私たちは彼女の部屋以外でデートをすることも避けた。もし、ふたりが連れだって歩いているところや、ましてや、ホテルなどへ入るところを知っている誰かに見られたりしたら、致命的だ

からである。

私は週に一度か二度、彼女のマンションへひそかに通うようになったが、誰にも知られなかった。もちろん、鈍感な野呂がカンづくわけはない。

私は社内で彼と顔を合わせるたびに一種の優越感を覚えた。

ところが、ある晩、その優越感を一挙に打ち碎かれるような事件が起った。

私が例のコール・サインを送って、野呂がいないことをたしかめた上で、亜麻子のマンションにあらりこんでいたときのことである。

電話が鳴り、受話器をとった彼女が顔色を変えた。

「大変よ、あなた」

受話器を置くなり、亜麻子は私をせきたてた。

「彼がすぐここへ来るわ。そばの公衆電話からなの」

「どうしよう」

私も蒼くなつた。

「出ていって、彼と出会ったりしたらまずいことになる」

「そのひまはないわ。とりあえず、ここへかくれてちょうだい」

彼女は寝室にあるつくりつけの押し入れの中に私を押しこんだ。

押し入れといつても、布団類や毛布類、季節はずれの衣類をしまっておくためのもので、かなりの広さがある。

私はそのなかへもぐりこんで息を殺した。

やがて、扉を開ける音がし、野呂が部屋へ入ってきて、亜麻子と話をしはじめた。

亜麻子はなんとかうまく言いつくろい、彼を帰そうとしている様子だが、相変らず酔っ払っている

野呂はしつこく彼女にまつわりついている様子である。

私は、はじめは、見つかりはしないと気もそぞろだったものの、野呂のしつこさにだんだん腹が立ってきた。

そのうちに、野呂はむりやりに、亜麻子を寝室へ連れてきた。

そして……。

ああ、そのあとのことは思い出すだに吐き気をもよおす。

寝室でのあらゆる物音が私の耳に生々しく伝わってきたのだ。

亜麻子が身もだえし、あえぐ気配も私にはありありとわかった。

あんなに野呂を愛していないと言い切っていた亜麻子が、彼の愛撫に喜悦の声さえもらしはじめたではないか。

それは、私が彼女をベッドで抱いたときと同じ反応だった。押し入れの暗闇の中に、ふたりのからみあった姿態が、まさまざと浮かび、私は腹の中が煮えたぎった。

(売女め！)

野呂を憎むと同時に、亜麻子をも憎まずにはいられなかった。

(ふたりとも、いつか手ひどい仕返しをしてやるぞ)

押し入れのなかにいた時間は、ほとんど永劫と思われるほど長く、そこにいる間、地獄の責苦にまざる苦痛を味わわされた。

ようやく、野呂が帰ったときには、私は放心状態になっていた。

「ごめんなさいね」

亜麻子がけろりとした口調で言った。

「あたしだって、あんなふうになるとは思わなかったのよ」

私は虚ろな眼で彼女をみつめ、同時に、自分の彼女への愛が冷ややかな憎悪に変わったことを悟った。

野呂と亜麻子に対する殺意が芽生えたのは、それ以来である。

私は自分の憎悪を気ぶりにも出さず、冷酷に計算し、その機会をうかがった。

野呂にはもちろんのこと、亜麻子とも、平然と今までどおりにつきあいながら、ふたりを破滅させるいい計画はないかと考えつづけた。

一ヵ月と経たないうちに、私はすばらしいアイディアを思いついた。

つまり、亜麻子を殺し、その犯人に野呂をしたてあげるといふ計画である。

これは簡単に実行できるように思えた。

まず、野呂を泥酔させ、私が野呂を彼の部屋まで送り届け、さらに前後不覚にするために睡眠薬入りの酒をすすめる。

そうして、彼が寝入ったすぎに、亜麻子のところへ行き、彼女を殺す。

こうすれば、野呂のアリバイがなくなり、彼女を殺した容疑は彼に向けられるにちがいがなかった。

なにしろ、亜麻子の部屋に自由に出入りしていたのは彼以外にはないのだから……。

彼以外に出入りしていたのは、私だけだが、私と彼女の関係は誰も知らないし、私が彼女の部屋に出入りしてたのを目撃している人物もいないはずだった。

ふたりがおたがいの関係を誰にももらさず、誰にも気づかれないよう極力注意していたのが、今度の場合、大いに役に立つことになるわけだ。

私が警察に疑われるわけではない。

亜麻子の部屋を厳密に捜査されれば、私の指紋や頭髮の類が発見されるだろうが、それが私の指紋